

『のらくろ探険隊』と『スンガリーの朝』

——戦時下の児童文化における「満洲」——

磯田 一雄

一、「二つの学校」——教科書と児童文化——

子どものための大衆文化（児童文化）と学校文化の乖離は、現代社会における普遍的な文化現象の一つである。イギリスの児童研究家ヒンメルワイトは、「現代の子どもたちには、二つの学校がある」として、一つは「通常の学校」（高尚）であり、もう一つはテレビ（低俗）という相反する世界であるとする。文学の場合で言えば、学校で教えられる「国語」教材には優等生文化やエリート性、あるいは古風な教訓性・高尚さが著しく、子どもの興味や感動を

呼び起こすものは少ないのに対して、子どもの心を捕らえて放さないのが、低俗・俗悪と非難される「漫画」であることはいまさら言うまでもない。¹⁾

さらに、佐藤忠男らの指摘するように、手塚治虫や臼土三平などの作品には、興味性だけでなく、高度の思想性と壮大な想像力、強固な正義感と力強い運動感覚などが描かれていて、教育的価値が高い作品も多い。例えば「人類の未来」とか「人間という動物のおろかしいほどの残忍さ」とかのような、学校文化では応えてくれないような問題に正面から取り組んでいるものがある。ということで、実は果たして教科書と漫画とどちらが「高尚」なのか「低俗」

なのか、一口には言えないような事態も少なくない。⁽²⁾

現代は学校文化がその権威を主張すればするほど、「なぜ学校へ行くのか」が問われるという逆説的な事態が生じている時代である。定説では教育とは文化の「伝承」であるが、しかし学校でなくても文化は伝えられる。というよりも、学校で伝えられるのは文化のごく一部に過ぎないのではないか。時には学校は本当に文化を伝えているのか、と疑いたくなることさえある。学校文化よりも児童文化のほうがはるかに豊かなことが多いのではないのか。というのは文化の「伝承」には「伝える」だけでなく「承ける」という学習者側の主体的な行為が不可欠だからである。学校は文化を「伝達」する機関に過ぎないのではないか。それに対して児童文化には確実に「伝える」だけでなく「承ける」があるのではないか、というより「承ける」側面がなかったら、そもそも児童文化は成り立たないのである。

二、昭和十年代の児童文化が用意したもの

昭和十年代の児童文化と言うと、単行本の読み物と漫

画、ラジオやレコード、日刊子供新聞に紙芝居などのほか、児童雑誌では『幼年倶楽部』、『少年倶楽部』、『少女倶楽部』などが花盛りであった。このうち『少年倶楽部』は比較的よく知られているが、あとの二つはその陰になつてあまり知られていない。しかし昭和十年代に物心ついた子どもたちは、まず『幼年倶楽部』から児童文化の世界に入るのが普通であつた。⁽³⁾

こうした児童文化が与えてくれたものは単におもしろいだけではなく、実際に生活の中で確かめたり、あるいは適用したりすることができた。例えば『子供の科学』に連載されていた「科学ハイキング」は大人が読んでもおもしろく、今日でもその通りに実施してみることが可能なものも多い。実際筆者は『子供の科学』昭和十六（一九四一）年十月号と十一月号に連載されていた「今月の科学ハイキング・八ヶ岳の動植物見学」を手がかりにして、翌四二年夏休みに父に連れられて八ヶ岳の夏沢峠越えに出かけている。雑誌に書いてあることを自然観察の手引きとして利用しながら、昆虫採集のほうは道具などの関係であきらめ、山地の植物を採集して押し葉を作っている。そういう具体的に役立つ情報は教科書にはまず載っていなかった。また

『東北の旅から』（昭和十六（一九四一）年十二月号）のように、実際にその通りに実施はしなかったが、何度も読み返して見たくなるような記事が多く、そうしているうちに自然と知識が身に付いてしまったことも多かったように思われる。いずれにせよ、理科に関していえば、『子供の科学』の記事のほうが、どれをとってみても教科書よりは断然おもしろく具体的であった。教科書は戦時下の有名な『初等科理科』になってからは、作業の手順だけでその結果は実際にやってみない限りわからないためになつていたが、こういう教科書を用いてもなお、先生が旧態依然たる暗記式な授業をしているかぎりは、児童雑誌などで蓄えた知識を小出しにするだけで、試験は無事に乗り切れたのである。

また児童文化は当時の社会情勢について啓蒙的な役割を果たした。『満洲』の実際の状況や満蒙开拓青少年義勇軍などは学校では具体的に教えてはくれなかったが、本や雑誌を通して知ることができた。例えば、『民族協和（五族協和）』については、田河水泡の漫画『のらくろ探険隊』や、石森延男の児童小説『スンガリーの朝』などが教えてくれた。こういういわばアップ・ツー・デートな問題や、

持続的・発展的な楽しみや追求が教科書には乏しかった。また同じ楠木正成でも、教科書のそれと『少年倶楽部』に連載された大仏次郎の『楠木正成』とは印象が全く違う。「小夫丸」という河内の里の農民の子どもが、正成の家来になつて働いているうち、「だんだんに、はじめは洋としていた正成公の人間像の奥深さに魅せられていく、その過程が、赤坂・千早の戦から始まつて、移り変わる世の流れを背景に描かれていく」。

読み返しながら感じたことは、あのきびしい戦時の重圧の中で書きつづけられたこの物語が、なんの神がかり的な気負ったところもなく、もつと大らかな理想像を願ひ求めていく正成公の人間像が、終始おちついた筆致で描かれているということでした。それが、敗戦の後も同じ調子でじっくりと書き進められていて、なんの不自然さもなく読んで行けるんです⁽⁴⁾。

このように子どもの目を通してとらえた、楠木正成の人間味や存在感が伝わってくるようなことは教科書にはありえない。そこには明らかに、「嗚呼、忠臣楠公！」式の通

俗な尊皇史観とは質の違った文化があった。何がそれだけ違わせているのかと言えば、やはりリアリズムの有無に求めるしかあるまい。

これは戦後にも共通する問題である。一九八二年の教科書問題が国際化する以前の中学校の社会科歴史教科書には、例えば「満洲事変」のこと、「満洲にいた日本軍は、奉天（シエンヤン＝瀋陽）の郊外で鉄道爆破事件をおこし、中国との戦いを始めた」というように、かなりあいまいな書き方をしていたものがある。さすがに戦前・戦中の教科書のように中国側が爆破したという嘘は書かないが、それを「中国側のしわざだと宣伝してこれを開戦の口実にした」という重大な事実をかくしているから、これでは肝心の事件の本質がわからない。その時代でも、「児童文化」は歴史の真実をはるかにくわしくしかも興味の持てるように伝えていた。⁽⁵⁾さすがに「満洲事変」に関する限り、こんな教科書はなくなっていると思われるが、似たようなことはいつも起きているのである。

さらに児童文化はそういう視点や思想のほかにも教科書にないものを用意した。それは通り一遍でない追求の面白さ（展開）と、会話である。童話も少年小説もまた漫画

も、筋の展開と並んで会話が面白かった。佐々木邦などはさらに議論（ディベート）の面白さを堪能させた。例えば佐々木邦の『トム君・サム君』（少年倶楽部）昭和八（一九三三）年十一月号に連載）などはその典型であろう。これは当時の日本の少年小説には珍しく国際性を帯びていて、安井君と本間君という二人の小学六年生が、同年齢のアメリカ人の双子の兄弟トム君・サム君と親しくなり、ある日彼らの叔父の新聞記者ジョンを泉岳寺に案内して、忠臣蔵の話をする。トムとサムは興味を持ったようだが、ジョンは「やっぱりこれは少し変ですよ」と首を傾げたのである。⁽⁶⁾

「なぜですか？」と本間君が訊いた。

「この四十七人は皆ハラキリをして死んでしまったん
でしよう？」

「そうです。一人残らず見事に切腹して相はてました」
「しかし仇は一人でしょう？」

「ええ」

「一人の命を取って、四十七人死ぬのは、浪人のほうが
四十六人損をしています」

「それは仕方がないです」

「どうも勘定が分かりません」

「それは殿様の仇を討つんですから、そんなことを考えてはいられません。兎に角、相手を生かして置いたんじや武士道が立たないんです」

「それじや武士道は法律を破つてもいいんですか？」

「いけません」

「四十七浪人は法律を破つたから、切腹を仰せつかつたんでしょう？」

「さあ。それはそうかも知りませんけれど、そこが大和魂です。やむにやまれぬ大和魂ということがあります」

ここでは武士道という疑われることのなかつた固定觀念の相対化が求められている。この種の具體的な事実に基づく討論は日本の教科書教材の中でもっとも欠けていたもの一つであろう。是非を論じて容易に決着がつかない、などということは教科書の世界にはないことである。それに対して児童文化ではむしろ簡単にケリがついてしまつては面白くない。いわんや初めから答えが決まつているなどは

論外だということになる。

そもそも教科書には一般に「語り」(ナレーション)はあつても、「会話」(カンバーセーション)はほとんどなかつた。もつとも小論で考察する石森延男は国語教科書における会話教材の拡大に貢献している。その一つの手段が劇化であつた。戦後の第六期国定国語教科書、「いいこ読本」は会話や劇化教材を大幅に採り入れている。またこの時期は中学校用を含めて国語以外の教科書でも会話体の教材がかなり入つている。しかし右のようなユーモラスな掛け合いやディベートを含めるまでには至つていない。

いわゆる戦時期は学校文化と児童文化がきわめて接近した例外的な時期である。これはいうまでもなく教科書に類似した統制が児童文化にも及んだためであるが、ひよつとすると児童文化は戦中期のほうがすぐれていたのではないかとさえ思われることがある。これは統制によつて「高尚」なものが奨励され、「低俗」なものが追放されたといふだけではなく、基本的にはまだテレビがなかつたために、活字メディアの比重が圧倒的に大きかつたこととならんで、中等学校へ進学しない子どもが圧倒的に多かつたためではなかつたかと考えられる。中学校や高等女学校に行

けず、小学校卒業後店員や家事手依いなどにならなければならなかった前途有為な子どもたちが、仕事に就きながら文化的な慰めや励ましを得るのが児童文化だったという面が大きかったのである。児童文化は学齡期児童のみならず、それ以上の年齢の子どもたちにとっても「学校に代わる教化機関」だった。それだけに児童文化の従事者も仕事に張り合いがあったかもしれない。

実際皮肉なことに、中日戦争の時期期は、日本の児童文化が社会的にもっとも祝福され、ある面では、もっとも收穫の多かつた時期である。昭和十三（一九三八）年に、内務省は、「児童雑誌統制に関する示達事項」を出した。これによつて、児童読み物のあまりに荒唐無稽なもの、殺伐野卑なものなどは国家によつて禁圧されることになった。以前の立川文庫などは、活字が小さく、そのうえ、ふり仮名をふつてあるため、児童が耽読すると眼を悪くするという非難を受けたが、この統制では活字の大きさの制限なども行われ、また駆け落ちといったような、児童読み物に不適当と判断される言葉も用いてはならないことになった。

一九四〇年、大政翼賛会の肝いりで、少国民文化協会が結成され、児童文学や児童娯楽に関するすべての分野の

人々がこれに結集した。かつて清貧に甘んじさせられた児童文学も、ここで児童文学者が役員となつて、統制されていた用紙の割り当てなどの権限を持つことによつて、どし本の出版もできるようになった。もっとも、こうしてもたらされた「良心的児童文化の黄金時代」は、実はファシズム体制にみごとに飼いならされたものにほかならず、いわゆる俗悪読み物と、その対極にあつた生活綴方運動とを両方とも壊滅させ、そのあとに、「正しく強く朗らかに」戦争に協力しようという読み物をのこしただけであつた。

ただこういう児童雑誌も、太平洋戦争が始まると同時に、一九四二年からは急に薄くなり、中身もつまらなくなる。戦争のために貴重な資源である用紙が減らされただけでなく、「戦意高揚に役立つため」ような記事は片端から切り捨てられたためである。太平洋戦争の勃発は昭和十年代の児童文化の時期区分においても重要な意義をもつのである。

三、児童文化の「満洲」キャンペーンにおける「詩と眞実」

「満洲ブーム」なるものがあるという。NHKで放映された「大地の子」あたりが火付け役かも知れない。「満洲」がそのように問題になるのは、生体実験で悪名高い七三一部隊や、撫順郊外の平頂山事件のような大虐殺など日本側が行った数々の悪行が最近になって明るみに出され、その告発や反省をめぐる論議や出来事の頻繁なことがあるのも事実である。しかもつとも重要な事実は、「満洲」が現代日本人の形成史と切っても切れない深い縁があるということではなからうか。自分には関係ないと思っている人も試みに少し昔にさかのほれば、必ず「満洲」関係者を身内に一人や二人発見することだろう。なにしろ短い間に民間人だけで一五〇万人余と、一つの国家が優に形成できるほどの日本人が渡ったのであるから。児童文化がそのキャンペーンに果たした役割は小さくない。

日中戦争勃発後、児童雑誌や児童読み物は教科書を差し置いて「今回の事変」の正当性と、アジアにおける日本の

指導的役割の宣伝を始めたが、それに関連して「満洲」もその舞台に登場するようになる。その典型は当時最高の人氣漫画であった、田河水泡の「のらくろ」であろう。

よく知られているように「のらくろ」は、昭和六（一九三二）年一月号から十年十月月の長期にわたって『少年俱樂部』（講談社）に連載され、一九三七年には単行本で一五〇万部売れるなど、絶大な人氣を誇ってきた漫画である。最初のうちは軍隊生活を背景とした日常的な笑いが主体で、戦争といっても蛙や河童・山猿などが相手の奇抜であるがむしろたわいのないユーモラスなものに過ぎなかった。ところが日中戦争勃発後は、中国に見立てた隊の国との戦争で、大尉にまで昇進した主人公のらくろ部隊長が、つぎつぎと武勇伝をつくり大活躍する。しかしやがて「神聖な皇軍を漫画にするとはなにごとか！」という軍の批判を受け、「のらくろ」は、猛犬連隊を「除隊」して「大陸探険」に赴く。そこで「朝鮮」半島からきた「金剛」はじめ、漢・満・蒙の各民族に対応すると思われる豚の「汗」・山羊の「蘭」・羊の「包」などの有志の協力を得て石炭や金鉱をさがし歩きに出かける。という体裁がいいが、実体はあまり生彩のない放浪の旅で、最後は昭和十六



顔によつて豫備役となりました。そして、隊長殿の激励の言葉を胸にきき、大膽へ進出することにりました。

ひとつ一郷となつて、堂々と出陣のやうに、三百人く結の力があるから、とまどひずることはありませんが、のらくろはたつた一人で目子知らずの國へとび出したので、何か何やら見當がつかず、弱つてゐるところへボンと肩をたいて、

「ヤア、のらくろさんちやありませんか。」と出て来たのが朝鮮生れの金剛君です。

「僕は君の同胞だよ。協力しようよ。」さういつて握手してくれた時、のらくろはどんなに喜んだか知れ

のらくろさへ
おなれば
あの池をとつて
しまふのだが

やしません。

たつた一人内地から開拓に出かけたのらくろが、思ひかけない金剛君といふ親友を得たのです。二人はかたがひに百萬の味方をもつたやうに喜が合つて、たちまち兄弟にもなりました。

すると又、ちやうどそこへ大陸の滿洲、支那、蒙古などから、獵君、包君、汗さんなどが、せひしよに力をかして共同で大膽建設につくしたいと申し出て来たので、こゝに東洋のいろ／＼の民族がそろつたわけですね。おたがひに自分の長所をもつて、ほかの民族を助けあ

(二九四二)年九月号で珍しく一回休載した後、翌十月号でいかにもとつて着けたような結末であつた。終わりとなつてゐる。

漫画だからもちろんナンセンスな箇所には満ちているが、この「のらくろ」に終始一貫しているまじめな部分は、満洲国の謳い文句である「民族協和」(五族協和)である。例えば単行本『のらくろ探險隊』(『少年倶楽部』に連載されたものとは、主題は本質的に同じだが、筋はかなり違つてゐる)の冒頭に、のらくろが「熊」(ソ連)から大陸(滿洲)の諸民族の「利益」を守つてゐる場面が出てくる。これはまさに「五族協和」のわかりやすいキャンペーンである。当時「五族協和」という用語は小学校(国民学校)の教科書には見出せないし、ここでも「五族協和」という言葉は用いていないが、これはその理念をいかにもすんなりと、抵抗なく子どもに受け入れさせる役割を果たしたのではなからうか。もちろん読者である子どもたちが「指導者」のらくろに自己を投影してのことである。彼らは間違つても汗君や蘭君はおるか、「半島人」の「金剛君」にさえなりたとは思わなかつたであらう。

同じく「滿洲」を舞台とした『少年倶楽部』の連載もの

に、加藤武雄『饒河の少年隊』（昭和十八（一九四三）年一月号（十月号））がある。これは「のらくろ」のように世に知られてはいないが、いつそう「満洲」の痛切な実態に深いかかわりがある。

『饒河の少年隊』は、連載第一回のタイトルの横に書かれたように、「皇国のため満洲開拓に身をさ、げる雄々しい青少年義勇軍は、どうして生まれたか。『饒河の少年隊』は、この問ひにこたへる感激的な物語」である。「満洲国」が作られて間もない一九三四年、十五、六歳の少年二十九人が、ウスリー江をへだてソ連に接する、開拓地最前線というよりは、満洲防衛最前線の饒河に入植した。これが「手本」になって、満蒙開拓青少年義勇軍が大々的に組織され、満洲の僻地に次々と送られるのだが、その企画の責任者である東宮鉄男や加藤完治も仮名で登場する。その苦難に満ちた生活のなかで一人が命を落とすが、仲間が協力して恨みを晴らすという筋である。

満洲集団移民の最初は一九三二（昭和七）年十月の東北の在郷軍人五〇〇名からなる「佳木斯屯墾第一大隊」であるが、第一次弥栄村と呼ばれるものである。翌三三年第二次千振村五〇〇名、三四年にこの「饒河の少年隊」のほか

「第三次瑞穂村」（三〇〇名）の入植が行われている。これらの「試験移民」が一応の好成績をあげたので、政府は一九三六年八月十大国策の一つとして、満洲開拓民の大量入植計画を策定し、三七年以降二十年間に、四期に分けて第一期五年間に十万户、一後各期ごとにこれを増やしていくことにした。それが日中戦争勃発のため壮丁の多くが軍役や軍需労務に充てられることになったため、一般開拓民のほかにも、少年義勇軍の送出が計画され、翌三八年一月「満洲開拓青少年義勇軍要綱」が策定され、同年五月茨城県内原に内地訓練所が創設された。

加藤武雄『饒河の少年隊』は第一次義勇隊であるが、これが『少年倶楽部』に掲載中の一九四三年五月には、全国初の郷土中隊と言われた、静岡県選出の義勇軍植松中隊二九七名が饒河に入植している。既に開拓団送出計画の第二期に入っているが、太平洋戦争の始まったこの時期においては、満洲開拓は国家総力戦の有力な一環とされ、開拓民とりわけ義勇隊は対ソ準戦闘要員とされた。ことに「清溪開拓団」のごときは関東軍の基地よりもはるか前線の国境に配置されたのであり、これが敗戦時に未曾有の悲劇を生む結果となったのである。¹⁰⁾

彼らは一九四〇年三月に静岡市で編成され、内原訓練所で一カ月あまりの訓練を受けた後五月渡満、牡丹江省寧安の現地訓練所（ほかに四カ所あった）に入所した。大陸農法による農作業の実習を受け四三年五月に「清溪義勇隊開拓団」として独立營農に入ったのである。また軍事訓練を受け関東軍の大演習にも参加している。「あこがれの関東軍」への「軍役奉仕」という名の勤勞奉仕もあった。関東軍にとって彼らほもつとも使いよい効率的な勞務提供者であつた。この間四二年三月には「のらくろ」の作者である漫画家・田河水泡が寧安訓練所を訪ねている。田河もまた漫画を通じて義勇軍のキャンペーンに協力した一人であつた。

彼らの入營は四三年に既に始まっているが、四四年七月には全員が徴兵検査され、召集者が相次いだ。しかも召集は令状ではなく電話通知のみとなるという状況であつた。敗戦の年四五年五月には団員の大半が召集されて營農はマヒ状態になっていた。彼らのうち「花嫁」を迎えていたものはまだいなかった。七月には饒河飛行場が停止されて憲兵隊がさっさと引き揚げてしまい、八月九日午前零時ソ連軍が国境で一斉に侵攻開始、十三日ソ連軍に包圍されて、「饒河少年隊」のうち未召集で残つた団員と、団長と医師

の家族の全員が日本降伏の日を待たずに全滅したのであつた。

『饒河の少年隊』の少し前に、誠文堂新光社の『子供の科学』まで、この雑誌に似つかわしいとも思えない、田郷虎雄の「亜細亜の柱」という満蒙開拓義勇軍を描いた小説が連載されていた（昭和十六（一九四一）年十二月号で終結）。こちらは義勇軍だけでなく、内地に残つて「日本一の百姓」になることを決意する子どもとの組合せになっているのだが、やはり満洲のほうに力点があつたといえよう。いづれにせよこれらの義勇軍ものは、『スنگリートの朝』や『のらくろ探險隊』とは違つて、子どもらしい甘つたるい憧れではなく、本當のきびしい覚悟がなければ「満洲」ではやつていけないという印象を与えたであろう。

また長谷健は一九四一年に『開拓村の子供』を書いていますが、ここでは「日滿親善」などと言つても、現実には相互に全く離れて暮らしているのであり、日本人の子どもが釣りに行つて「満洲人」の子どもにビクを取り上げられたり、開拓村の子どもが近くの「満洲人」の学校の生徒（五・六学年に相当）を招待して相撲大会を開いたのはよいが、一人に怪我をさせて親善どころか逆効果になりそうに

なるなど、かなり地道に開拓村の子どもたちの生活現実を見つめているのが特徴である。

『少年倶楽部』や『少女倶楽部』の読者になる前に必ずと言っていいくらい通過するのが『幼年倶楽部』（講談社）であった。ここでは昭和十四（一九三九）年四月号から、千葉省三『ニルスノパウケン』とならんで、山中峯太郎『アジヤの兄弟』が連載されている。これは上海を舞台にしたもので、中国人に排日思想を吹き込むイギリス人やアメリカ人を撃退する物語である。山中一流の血湧き肉躍る場面が続出する。翌昭和十五（一九四〇）年四月号から連載された、南洋一郎『新日本島』では、ボルネオ付近の無人島が舞台となっている。もやい綱がゆるんで小舟が川から海に流れ出し、乗っていた太一少年と、親しい少女とその母の三人が無人島に漂着する。太一が「野蛮人」に捕まったことからその島には石油が出るということがわかる。やがて行方不明だった少年の父やあとからやってきたイギリス人の一行をたくみに撃退して、この「未発見」の島とその石油資源が日本のものとなるという、いささか荒唐無稽な物語であるが、やはり冒険とサスペンスが主体である。

『満洲』を舞台としたものとしては、戦中および戦後初

期の国定国語教科書の編纂・執筆で知られる、石森延男の『スガリーの朝』が、昭和十六（一九四二）年四月号から翌年三月号まで、十二回にわたって連載されている。これは小学校二年をおえたばかりの東京育ちの少年一郎が、家庭の都合でハルビンの親戚に預けられることになり、一人でハルビンまで旅をして、現地の日本人学校（当時の正式な名称は在満国民学校）に入り、さまざまな新しい経験をするという物語である。雄大なスガリー（松花江）と、明るく近代的でエキゾチックなハルビンの都会生活が描かれている。その点で探険や開拓地を対象としたものとは異質な、おだやかな小市民生活を描いているという色彩が強い。主人公が小学校低学年生であるためでもあるが、同時にこれは石森延男という作家の特質でもあると言えよう。石森延男は、当時既に第四期国定国語教科書（いわゆる「サクラ読本」）に登場する、「大連日本橋」・「大連から」や「あじあに乗りて」などの「満洲」教材の原作者であり、また一九三九（昭和十四）年四月から文部省に移って、国定国語教科書の編纂者となっているが、超国家主義・軍国主義の色彩のもつとも強まった第五期国定国語教科書（いわゆる「アサヒ読本」）でも、そういう色彩を露骨に感じ

させるような教材は執筆していない。戦後石森が引き続いて第六期国定国語教科書(いわゆる「いいこ読本」)の主任編纂者になったのはそのためでもあつたらう。この点は特に注目する必要がある。⁽¹²⁾

昭和十年代の児童文化で「満洲」にかかわるものとしては、石森の作品のように満鉄附属地のような都市型の日常生活を描いたものはむしろ例外で、『饒河の少年隊』のように開拓地の生活を描いたもののほうがむしろ主体であると言えよう。これは「満洲」における日本人の主要な生活のあり方が昭和十年代に入つてはつきり変わってきたことと関係がある。

日本の「満洲」支配は「満洲事変」までの二十五年間と、その後の十五年間とは対照的である。事変までは附属地を中心とした比較的に平和な、先進資本主義諸国の植民地活動の型や伝統に沿つたもので、経済的な利潤の獲得だけが目的であつたのに対し、事変後は全「満洲」を対象として、経済的効果や効率を無視した投資を国策的・軍事的に強行した。社会支配においては皇民化 \parallel 日本への同化政策が露骨に出て、「第二日本帝国」の模造を企図したのである。これに応じて「満洲」に移住した日本人の性格

も、事変以前と以後とは対照的に異なっている。事変前は関東州と満鉄沿線附属地中心の満鉄従業員や商人などの活動が中心であつたが、事変以後は日本の支配が全「満洲」に広がり、それにともなつて農業移住者の飛躍的増加を見る。日本人の移住者数は、関東局の調べによると、一九三〇年には、二万三千七四九人に過ぎなかつたのが、一九三五年には四九万四七〇八人と倍増し、一九四〇年には、一〇六万五〇七二人とさらに倍増して一〇〇万人を超えている。こうした事情を反映して、児童文化の内容にも北原白秋の「ベチカ」に代表されるような都会的な「満鉄附属地」の日常生活における情緒を求めるものから、「探険」や「開拓地の生活」など「アジア」と「お国のため」を主体にしたものへとの変化が生じてきたのである。内地の教科書には開拓地の生活などはまず載らなかつたことを思うと、やはり児童文化はそれだけ教科書より社会の事実に見極めていたのだと言えよう。いっぽう『少年倶楽部』など講談社文化がわが世の春を謳う中で、三一年に復刊された『赤い鳥』が一九三六年に終刊を迎えているのはそれを象徴する出来事であつた。

四、「満洲」における児童文化の創造

「満洲」は日本の教育改革の原点であり、多くの先導的試行を行い、大正新教育の流れを引く「満洲新教育」は、日本内地より遅くまで生き残つたことは既に指摘されているが、児童文化の発祥地という点でも満洲は忘れられてはならないであろう。石森延男が「満洲」に渡つて精力的に児童文化活動を展開したことは、明らかに、「満洲」が異文化の地として認識されたことに関連があると思われる。それに対して台湾や朝鮮ではもっぱら日本内地の文化を導入してこれに同化させてしまう意識が強くと、その土地の民族の言語や文化をそれ自体日本語や日本文化に対抗するほどのものとして取り上げる意識が弱かつたと言えよう。概本瑞生はこのことを端的に、「台湾や朝鮮半島では異文化との接触が始まる前に日本の軍事行動があつたが、東北（中国東北地方）では中国に対する大規模な軍事行動を起す前に中国との異文化接触があつた。その分だけ日本人は異文化を強く意識していた」と言っている¹³。

この「異文化接触」の効果は在満日本人の教育活動に典

型的に現れる。「満洲補充読本」のような副教科書が生み出された事情もこれによつて理解できるであろう。異文化を認識したからこそ補充教科書が編纂されたのであり、また同時に活発な児童文化活動も展開されたのであつた。

しかしそれは二つの方向を異にするべくトルを含んでいる。一つは異文化に接近しようとする姿勢であり、もう一方は逆に異文化から日本文化を擁護しようとする姿勢である。領土であつた朝鮮や台湾では、日本人の子どもが異文化に「同化」されてしまわないように、もつと悪い言葉を使えば「汚染」されてしまわないようにする見通しがあつた。それに対して「満洲」ではその見通しが持てなかつたということであろう。俗に「沿線官話」、あるいは「協和語」とあだ名された、中国語との接触による日本語のビジョン化現象がその典型的な例である。これは満鉄沿線の日本人が使用する一種のプロークン・チャイニーズである。「困つたときは漢字で書けば通じるさ」という尊大な態度と、武力に支えられた乱脈な半中国語が、そのまま「満洲」に移住する日本人の間に広まり、カタカナ発音と日本語をこねあわせた珍妙な会話となつて普及したのである¹⁴。

例えば「ニーデ・ノーテン・ホアイラだから、プシン

よ」の類いである。これは「你的（お前の）、脳天（脳袋）壊了（ばかもん）、だから、不行（だめ）、よ」という舌足らずな日中両語ちゃんぽんの侮蔑語である。⁽¹⁵⁾ こうしてまともな中国語によるコミュニケーションは到底できず、一方で日本語そのものも「汚染」されていくという状況を生み出していたのである。『スンガリーの朝』にはこうしたピジン化現象に対する石森の憂慮を描いている箇所がある。

石森は一九二六年五月に香川師範から南満洲教育会教科書編輯部で国語の補充教科書を編纂するために大連に移ってくる、その仕事と並行して児童読み物文化活動を精力的に展開した。石森はまず中学生程度を対象とした読み物雑誌として『帆』を刊行した。これは中学進学を計画している尋常小学校の子どもにとつても（進学のための）準備になると言っている。これを第三卷まで刊行して一年経ったので、その記念に「第四卷」は『満洲野郷土読本』号として刊行している。

石森はこうした読み物（副読本）の編纂は、（教科書Ⅱ正読本）による国語科が、本質から遠のいた形骸や末梢にばかり力を注いでいる。「これでは何年国語を学んでも、読（文力）は培はれない」。『帆』（『満洲野郷土読本』）のような副

読本を編纂したのは、「この末梢より本質へ逆戻りをさせて、迷はない国語科の明快なる華園に導かうと計画」したのだという。つまり石森は補充教科書をも含めた教科書と、児童文化（児童読み物）を車の両輪として国語教育を策定しようとしていたのである。⁽¹⁶⁾

ここで逸することのできないのは、石森が「ロシア人、支那人などの外国人と多く接しなければならぬ満洲の人々は、内地の人々よりは、一層に国際的思想に目ざめねばならない。日本の精神を自覚してゐなければならぬ」といつていることである。中国人よりもロシア人を先に立てていることは、教科書教材を含めて石森の作品の中にロシア人がよく現れ、逆に「支那人」の影が薄いことを予示しているとも言える。それと並んで、異民族・異文化との接触は、一方では「国際的精神」を育てもするが、他方ではかえって日本人としてのアイデンティティ・クライシスから、「日本の精神」をいっそう強調するようになるのではないかということをも予示していると考えられる。

石森はその後一貫して補充教科書の編纂とは別に、副読本や児童読み物の創作・編纂にのめりこみ、『童心行』・『新童話』・『子ども満洲』・『日本の少女』のような同人誌

に参加し、『少年少女よみもの——まんちゅりあ』（一九三〇年、春夏の巻・秋冬の巻の二巻）、『満洲文庫』（一九三二年、全十二冊。関東軍の検閲により発売禁止となる）、『第二まんちゅりあ』（一九三三年、一・二・三年用、四・五・六年用の二巻）、『満洲新史』（一九三四年、南満洲教育会編纂）、『新撰満洲事情』（一九三六年、南満洲中等教育会などの刊行にかかわり、一九三九年日本に戻つて後も、『文部省認定東亜「新満洲文庫」』（一九四〇年、全六編十二冊）、『満洲一日一話』（一九四一年、満鉄総裁室広報課編）などを刊行している。またこれとは別に児童文学関係の活動としては、石森は一九三二年に最初の童話集『どんづき』を大連で刊行し、千葉省三らの編輯による『童話』誌にも参加している。更に一九三四年には『満蒙の風物』・『満洲の美しい話』（ともに大連・東洋児童協会）を刊行している。

戦時下の作品としては、大連時代の最後に『満洲日日新聞（夕刊）』に連載した小説『もんくーふおん』（蒙古風）を、一九三九年『咲き出す少年群』と改題して新潮社より出版、第三回新潮社文芸賞を受けている。また、一九四一年十二月十一日には（石森によれば「童話」）『日本に来て』を刊行し、それとほとんど前後して『幼年倶楽部』（講談

社）の昭和十六（一九四二）年四月号から翌年三月号に、ハルビン在住の日本人の子どもたちを描いた小説『スンガリーの朝』を連載している。以下この一連の三つの作品を中心に、彼がそこに盛り込もうとしたメッセージが本当は何であつたかを読み解いてみたいと考える。

五、石森延男の戦時下児童文学作品に おける「満洲」

右のように石森は一九三九年から四二年にかけて「満洲」に関係のある作品を少なくも三つ書いている。これら一連の石森の作品には明確に日本人の姿勢を批判した箇所もあるが、そうでない場合でも、実は結果的にかなり日本人の姿勢の批判になつていふと思われような箇所がかなりある。ただしこれら石森の三つの作品は、既に拙著『皇国の姿』を追つて（皓星社、現在印刷中）の第一部「石森延男国語の成立と『満洲』」で、教科書教材との関連に焦点をあてながら梗概を紹介しているので、ここでは重複を避けて、戦時下児童文化としての重要な側面だけを取り上げることにする（石森はこのほかに一九四一年七月、帝国

教育会出版部から『マンシウ月ゴミ』を出している。

(1) 『咲き出す少年群』——もんくーふおん——

昭和十四年八月三十日

まず『咲き出す少年群』は、満洲日日新聞社から「満洲の子どもを主題としたものを書いてほしい」と頼まれて、三週間ばかりの間に書き上げ、最初「もんくーふおん」として夕刊に四十回ほど連載したものである。「もんくーふおん」というのは、「蒙古風」の中国語音で、大陸の春の魁さきがけとされる黄土の粉塵の混じった強い風のことである。この作品の「はしがき」で石森は、

……日本の少年をとりまいて、蒙古やロシアの少年、満洲人の子どもなどが、いつしよになつて、自然に憧憬し、なじみ、おそれ、疑ひ、争ひ、親しみあひ、思ひくゝの動き方をしてみせる。

今や日本は、大陸に巨歩を印した。

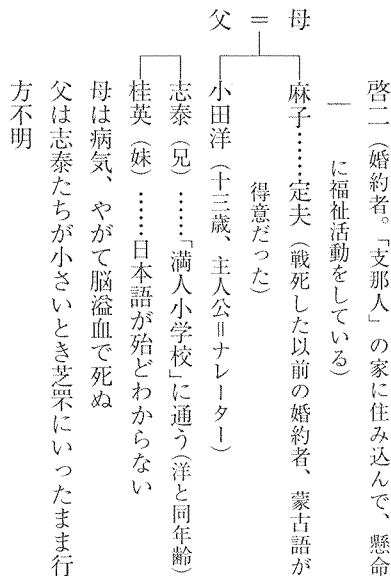
その足もとには、かうした見えない小さな花が咲きだしたのである。

日本の子どもたちよ、萎むことなく豊かに伸びてく

れ。躓くことなくまっすぐに育つてくれ。この念願が『咲き出す少年群』を書かせた。

と言っている。

この作品に登場する人物を簡単に図示しておこう。



チャクト……：昨年の春から洋の組に編入してきた蒙古の少年で、父は蒙疆政府の役人

ユヒリー……：白系ロシア人の少年で、尋一の時か

ら洋の組に入学、日本語には不自由
しない

蒙古人——たくましく日本人のように働く

白露天——固有の文化を持ち自立して生きている

満洲人——志泰兄妹のようにいたわり助けるべき存在

この作品は小学校高学年の子どもたちが中心のようでありながら、実は「大きくなつたら支那と日本のためにいつしよに働らかう」と子どもに呼びかける、主人公の姉の婚約者になる大陸壮士の「啓二」という人物が、事実上の主人公であるかのように見られる点で、石森の作品としては多少勇壮な雰囲気ももっている。しかし「はしがき」は先のようなことを言いながらも、

心ときめかすもの

ちごあそびするころの前

わたりする

という清少納言の言葉で締めくくっているあたりに、石森

の本領がどこにあるかを暗示するものがあるように思われ
る。

ところでこの作品は、今に東洋はきつと日本語を共通語にするようになると言い、「支那は、いくら日本人が来て
も、足りないほど広いんだから。日本は、これから支那大陸を足場にして、東亜を建て直さねばならないんだよ。」と「啓二」は「新しい東亜大陸建設」に献身する人間になるように洋に求めているが、その一方で「日本人はせつ
かちで、支那人が早く日本の風俗習慣になれないといつ
て、すぐ怒る」とか「民族性を、まるで豆腐みたいに四角
にでも、三角にでも切れると思つている」とか言うことを
始め、日本人の適応性のなさに対する批判がかなり出てく
る。

また「啓二」の言うような大仕事を成就することを期待
されるには、ロシア人やモンゴル人の気宇壮大なものに比し
て、日本人はあまりにも一般に覇気がなく、自分の中に閉
じこもろうとする傾向の強いことが批判されている。

特に「満洲人」や「支那人」との関係が石森にとつては
問題となる。まず日本人は概して言葉の壁が大きい。大陸
壮士「啓二」は「支那人」の家に入り込んで懸命に「支那

語」を習ってかなり通ずるようになっていたが、「洋」は小学校で「支那語」を習っていないが、実際には簡単な用件でも通じない。

また日本人学校には中国人がいない。「満人はあるかい？」と尋ねる啓二に対して、洋は「い、や。」と答えざるを得ない。この辺が多文化間コミュニケーションを要求されるはずの「満洲」では一番問題となるところだ。この点では白系ロシア人やモンゴル人のほうがはるかにすぐれている。この作品の中に出てくる、白系ロシア人のユヒリーは日本人学校に通っているので日本語が不自由なくできるし、妹のソーニヤも小学国語読本の巻二の「ウグヒス」を朗読するといった具合である。しかもユヒリーは洋にこう言うのである。

「ソーニヤは、日本語よりも、満洲語の方がずつとうまいんだよ。……」

この裏にね、満洲人の雑貨屋があるんだよ。そこにさ、同じ年の女の子があて、それといつも遊んであるものだから、上手になつてしまつたんだね。」

このようにごく自然に言語や文化を異にする他民族の間に溶け込んでいくことが一般に日本人には乏しかったのにはあるまいか。まず一般に「支那人」あるいは「満人」の家に遊びにはいけなかつただろう。それはきつかけができていくということと並んで、日本人には指導者意識が強く尊大で、彼らを蔑視していたことが基本的な理由であろうが、さらにこの作品の中でも強調されているように、「支那人」たちは「不潔・不衛生」で、生理的嫌悪感を覚えたということも大きな障害になっていたであろう。

その点日本人から見れば「清潔」な生活をしていたロシア人は、日本人ほどそういうことにこだわらなかつたのであろうと考えられる。しかしそれだけでは説明にならない。現にこの作品では、洋はユヒリーの家に遊びに行くし、『スガリーの朝』の主人公二郎も、やはりロシア人のマルハの家に遊びに行くのだが、そういう絶対の機会があつても一向にロシア語の習得に結びつくような場面（あるいは相互に自分たちの言語を教え合うような場面）が出てこないのは、やはりもともと日本語を他民族に強制的に使用させることに甘んじており、異言語・異文化を積極的に習得しようという姿勢がなかつたためであろう。

またユヒリー一家がいつも楽しく話し合っており、一家で合奏したりするなど豊かな生活文化をもっていることを洋が一種羨望の目で見ている箇所もある。これは成り上がりものの日本人の「リーダー」や「支配者」としての文化の低さ、貧しさを訴えたものとも言える。

(2) 『日本に来て』——『日本のよさ』とは何かの追求——

『咲き出す少年群』では、まだ将来の生き方についての明確なイメージを描いていない主人公「洋」に対して、日本とアジア（実際には中国）のために献身することを求めている。そのため当然のことながら中国語や蒙古語などの言語の真剣な習得を始め、「不潔・不衛生」きわまる（と普通の日本人には思われる）彼らの生活習慣にも溶け込んでいくことが重要であることを描き出していた。また異文化・異民族に対する寛容さが求められてもいた。

それに対して、約二年後に刊行されたこの作品では、「洋」とほぼ同年の主人公「二郎」が、異民族・異文化に触れて一旦自信を喪失した後、最後に「自分は日本の国民であるといふことを心から喜ぶ心がすべての基になるのだ」と、「日本のよさ」を再発見するすじみちを描いてい

る。自分には到底志士型の生き方はできないと、中学校進学にかこつけて植民地を逃げ出したようにも見える。もともと異民族・異文化の「よさ」を評価する視点はやはり十分あるのだが、植民地における日本人の態度に批判的な点がなく、理屈抜きで日本的なもの「よさ」を強調する点が出てきているのは当時の時勢を反映しているように思われる。さらに、「どうかすると、日本のりつば南国がらのことさへも、ききなれてしまつて、これがあたりまへのやうに思ひこんではゐないでせうか」と言い、読者の子どもたちに「ほんたうに《日本》のよさといふものを考へたり、感じたり、求めたりしてください」と要求している。

この作品の主な場面は大連から神戸に向かう汽船「ネ」丸の船中で、登場人物は次の通りである。

・主人公「二郎」……兄の通った東京の名門校「ア」中学校に入学する

——父親は満洲の病院の外科医、遠い戦地へ——
・付添いの「おかあさん」……父の万一のばあいを考えて凶案の勉強を希望

・「二郎」の兄……「二郎」の入学しようとする
「ア」中学校に在学

・「絵かきのをじさん」……絵を通じてロシア人に対する思い入れが強く現れる

・支那の少年(チョンイ)……洋と同じ十三歳、山東省曲阜出身、幼時に母を失い、朝鮮人の鍛冶屋リーさんに育てられる。シンリーの兄のような関係。『咲き出す少年群』の志泰とは違って実にたくましい

・朝鮮の少女(シンリー)……リーさんの娘

・アメリカ人の父子

この「童話」でのチョンイは、日中戦争が起こつてから、戦禍の上海へ父の消息を訪ねて行つたがどうにもならず、行き倒れになりかけたところをアメリカ人医師ロバート夫妻に救われる。ロバートさんのところで働いていたが、リーさんの依頼で今シンリーを連れて朝鮮の慶州へ行く途中で、それから横浜へ父の友人を訪ねるといふ、長い身の上話をする。教科書の教材でもそうだが、石森は勇ましい戦闘場面や、手に汗を握るようなサスペンスのある場

面は書いていない。むしろ「支那事変」の結果ふつうの市民にどんな影響が及んだのかを淡々と描いている。チョンイが「考へてみれば、こんどの事変で、何千といふ人、何万といふ人が、みるみるうちにこの世から消えていつてしまつたんだ。ちりぢりばらばらになつてしまつたんだ。してみると父の行くへをさがして歩くなどといふことは、いくらでもあるかもしれない。上海にくるときの船でも、みんな親しい人をさがす人ばかりが乗つてゐた。それもうまくさがす人が見つかれば、よほど幸運な方で、みな別れてしまふのがあたり前なんだ」と呟くあたりは、直接的な戦争の批判こそないが、一種の反戦文学では、と思わせるほどである。

二郎は言葉にしてもチョンイが英語・朝鮮語・日本語・支那語が自在に使えるのに、自分は事実上日本語しかできない。母のてほどきで油絵が描けるし、幼稚園のころから習つていたピアノも弾けるが、思い直してみると、ピアノも油絵も、弾く曲にしてもみな外国から来たものだ。そこで「よその国のまねごとにすぎないぢやないか。いくら上手になつたところで、外国人のあとをそのまま追つてゐただけの話ではないか。そんなことで、日本の子どもとし

て、おぼれるのか。」と思い悩む。異民族・異文化との接触によるアイデンティティ・クライシスともいえるが、そこで日本独自の誇るべきものといったら、国語読本に出ていた、源氏物語・古事記・万葉集とか、日本の国史……と並べてきて、挙句の果てには、「自分は日本の国民であるといふことを心から喜ぶ心がすべての基になるのだ」と、「血統ナシヨナリズム」に陥ってしまう。

『咲き出す少年群』では白系ロシア人を尊敬し、ある意味で学ぼうとしていたが、中国人や朝鮮人は保護すべき対象にすぎなかった。それに対して『日本に来て』では、少なくとも中国人のチョンイもえらい、ということをお認めている。またアメリカ人が、日本が危機に陥れた中国人民を献身的に救っており、船で出会った父子も親子ともどもなかなか気宇壮大な生き方をしていることを描いている（この作品は対米英開戦の三日後に刊行されている）。さらにロシア人は登場しないが、「絵かきのをしさん」の描いた多くの絵を通じてロシア人やロシア文化への愛も描かれていることも見落とせない。

この作品では「自分のところを一本はなれてみて、はじめて、自分のところがわかるんだ」という「兄」の言葉

に、いわば異文化接触の効用がみられる。しかし異文化・異文化に出会うことの意味が、結局は「日本のよさ」の再発見というより即自的一体化にされてしまう。せつかく多文化間コミュニケーションのモデルのようなチョンイという少年が描かれている反面、結局はやはり日本人には米の飯が一番、というのと全く同じように、日本人には日本の国体が絶対、という結論に短絡する。そしてその国体になれっこになって、感動しなくなることをひたすら恐れるという結末になるのである。

(3) 『スガリーの朝』——「ロシア人」志向の意味——

石森延男の『スガリーの朝』は、筆者が小学校入学直後から購読を始めた『幼年倶楽部』に、三年生になった一九四一年四月から一年間連載されていた物語で、東京からハルビンまで自分と同年の子どもが一人で旅を行つたハルビンの明るく近代的で、しかもエキゾチックな都市生活を描いている。石森は『スガリーの朝』の直前に『日本に来て』を書いている。『皇国の姿』を追つて『日本に来て』を書いている。『皇国の姿』を追つて『日本に来て』と『スガリーの朝』は、いろいろな点で対照的な作品である。

『日本に来て』は大連から東京に進学するという、当時実際に多かつた事例で、主人公「二郎」は中学校という立身出世コースをめざし、大連から東京へ行くのに母親がつきそつている。恵まれた家庭で育ち、豊かな文化——油絵・ピアノなどを習つている。アメリカ人や中国人からもそのたくましさを学ぼうとしている。

『スングリーの朝』は、逆に東京からハルビンに転校していく話で、それも小学二年—三年の子が一人で、しかも「あじあ」に乗る分だけ遠い旅をする。中学校へ進まず小学校（当時は国民学校）高等科を終えたら父について写真家の修業をする。家庭も豊かとは言えない。交遊は日本人中心で、ロシア人とは親しいが、中国人や朝鮮人は希薄である。

一方両者に共通しているのは、ともに父が戦地に出ており、母が写真なり図案なりを学んで生計をたてたいと希望している点、その母の下を離れて男の子が一人でよその家で暮らすようになる点である。また程度の差はあるがロシア人やロシア文化に対する関心も共通と言えよう。一方『日本に来て』で強調されていた「なれつこになつてしまつてはいけない」という警告は、『スングリーの朝』では、

一郎に宛てた母の手紙の形でもつと端的に現れている。一郎が沖・横川の「二勇士」史跡をはじめ、旅順や奉天など日本人がその血を捧げた場所を詣でたことを母に書き送ると、一郎の母はその意義を述べた後に、「たとへ、そのやうなりつばなおはなしのあるとちでも、なれつこになつてしまつてはいけませんよ。なれつこになつてしまへば、りつばだとかんじたころも、だんだんきえてなくなつてしまひますよ。それはおそろしいことです。りつばなおはなしであればあるほど、ありがたいおはなしであればあるほど、それをたいせつにしておくことです。」と書いています。

ところで『スングリーの朝』のどこが面白いのか」という問いに答えるのは必ずしも容易ではない。確かにハルビンという舞台はエキゾチックではあるが、既に指摘したように、もともと石森の作品には時代物や冒険物のような、劇的な展開は見られない。最初の三回分が幼い小学生の東京から満洲への一人旅になつてゐるという点を除けば、むしろ小市民的な穏やかな日常生活を描いている。その意味では佐々木邦のユーモア小説が日常的な時間と空間で読者の興味をつなぎとめる手立てを講じていたのと同じものがある。この作品には一方では、既に述べたよう

に、「なれつこになつてはいけない」という教訓を与えながら「日本のよさ」(血統ナシヨナリズム)を指摘しているが、それと並んで他方ではロシア文化への憧れのようなものも提示しているのは矛盾だとも言えよう。しかも石森はこの二つの極の間をたえず揺れ動いていたように思われる。

ハルビンに着いて早々、目抜き通りのキタイスカヤで出会ったロシア人の親子を指して、おばさんは「ロシアの人は、みんなよくはたらきますよ。そしてかみさまを大せつにしますよ。」と一郎に言つて聞かせる。氷で白くなつたまるで海のように見えるスングアリーに驚いている一郎におばさんは、スングアリーを見ていると心が広がるようだよ、日本が懐かしくなるとスングアリーを見に来るのだ、と言いながら、「クレスチエーニエ」というロシア人の珍しい水上の祭り(洗礼祭)のことを、夏のスングアリーの遊びの楽しさなどと一緒に語つて聞かせるのもそれである。

またおばさんもロシアに関心が深く、(ツルゲーネフの『かりうど日記』)を読んでいたりする。なぜ、と一郎が聞くと、「ロシアじんがそばにあるし、ロシアのたてもものもあるので、ロシアじんのことがしりたいの」と答えてい

る。

さらにハルビンでの一郎にとって、白系ロシア人との交遊が学校の友達(もちろん日本人)とのそれ以上に重要な意味を持っている。おばさんの隣にはピアノの先生をしているロシア人の老夫人が、八つになる孫娘のマルハと住んでいる。マルハはときどきこのうちに遊びに来る。マルハの両親は本国で働いているのだが、おばあさんは日露戦争で戦死した主人の墓が旅順にあるので、満洲を離れたくないのだという。一郎はハルビンに来る途中で旅順を案内してくれた、小山という大学生が旅順の大学に進むことにしたのは、祖父がやはり旅順で戦死したからだと言つていたことを思い出す。人間の運命には国際的に共通性のあることがわかる。それは中国人との間には浮かんでこないのである。

マルハとの交遊関係がかなり具体的に描かれているのに対して、「半島人の李さんや満人の陳さんや白系ロシア人のアレクセイさんとも友だちになりました」という箇所は、具体的な交遊の姿が明確に浮かんできてくるような書き方ではない。また『のらくろ探険隊』のように、漢民族と満洲族との区別はされておらず、勢いロシア人が五族のなか

に入ってしまうことになる。事実石森はこの作品の中で、「満洲国ないにゐる、五族の一つである白系ロシアじん」とはつきり書いている。⁽¹⁷⁾

マルハと親しくなった一郎は、風邪を引いた友達を見舞に行くときに、マルハをいっしょに連れていったりしている。この友達は「ニーデ」・「オーデ」など「悪い言葉」を使ったのを一郎にたしなめられると「生意気だ」と言つて、みんなに働きかけて一郎を村八分にしてしまつていたのである。このお見舞を契機に一郎と仲直りするのだが、つくづく異文化社会にいる日本人とは、付き合いくい嫌な存在だということを示したとも言える。ロシア人との間にはそれが無いのが救いでさえある。それはロシア人は主體的な異文化との適応・共存ができていたためなのではなからうか。

友達に村八分にされても主人公の一郎がひるまなかつたことに端的に示されているように、「おれ」・「お前」の代わりに「ニーデ」・「オーデ」を使うようなピジン化現象を石森は我慢できなかった。それは日本語を汚すものであると感じられたであろう。しかしロシア人は中国に移住しながらも、いっぽうで日本文化にも汚染されずに誇り高く生

きている。風土や権力機構には巧みに適応しながらも、民族語や固有の生活様式や宗教的信仰をきちんと守つてたくましく生きている。石森はそういうロシア人の生き方に尊敬の念を覚えると同時に、それに対して「在満日本人は……」と思うとき、心中穏やかでないものを覚えたのではなからうか。

石森は満洲に渡つた当初から「ロシア人や支那人……」と言つて、ロシア人のほうを重視するかのような姿勢を示していた。しかしこれは石森に限らず多くの日本人に共通した態度でもあつた。多くの日本人にとつて見れば、ロシア人は日本人に先立つて中国大陸を支配した「先輩」だといふだけでも、他の民族とは別格にならざるを得なかつた。また彼らの生活様式は日本人から見ても非常に「清潔」であつた。中国人の「不潔さ」に生理的嫌悪感を示す日本人の多かつた中では、これもロシア人を浮上させる重要な要因であつたろう。更に当時の日本人にとつてはロシア人の方が中国人よりも「開放的」だと感じられたためもあるだろう。⁽¹⁸⁾しかし石森のロシア傾倒はそれだけではなお説明できないように思われる。

ロシア人は「よくはたaramasよ」そして「かみさまを

大せつにしますよ」と一郎の「おばさん」は言う。前者なら日本人も決して負けないだろう。しかし後者となると全く事情は異なる。彼らは極貧の生活の中でも教会をまず建設した。当時「満洲」では「ロシア人が千人寄れば教会を造るが、日本人が千人寄れば女郎屋を造る」とよく言われたという。これは日本人の言う単なる「信心深さ」などというものではなく、それによって生活の根源が支えられているのである。そういう存在自体を支える原理が日本人には決定的に欠けている、という自覚が当時の心ある在満日本人の憂いでもあった。⁽¹⁹⁾

梶木は「異文化のなかに日本の文化をどう位置付けるのか」という問題を、今日果たして解決できているだろうか。また自らの文化を守りながら異文化をどのように認めてゆくのかという課題もまだ議論さえされていないように思われる⁽²⁰⁾と指摘する。当時こういう課題を石森が果たして明確に自覚していたかどうかはわからない。しかし満洲における(白系)ロシア人の生き方は、この課題に対する一つのヒントを提供するものように石森には思われた可能性があるがあるのではないか。これはあくまで一つの仮説であるが、石森のロシア人・ロシア文化への関心は、実は異文化

における日本人の適応のあり方の手本としても意味を持っていたのではないかと考えることもできよう。実際戦時下においても、「北滿」三河^カ地方で酪農を営む白系ロシア人の住宅や生活ぶりからは十分に学ぶものがあるとして、満鉄調査部で詳細な調査を行っている。そこでも辺地とは思えないような立派な教会が注目⁽²¹⁾を引いている。

筆者は以前「一種の難民である白系ロシア人に対するエキゾチシズムは、日本人の白人コンプレックス……を反映して、石森だけにとどまらず満洲には普遍的だった」とし、軍国調が厳しくなっても、教科書の教材に最後までさまざまな形で登場するのはそのためだと論じたことがあ⁽²²⁾る。確かにそうした側面も否定できないが、それだけにとどまらない、もっと積極的な側面もあったのではないかと今は考えている。それはまさにこの、「異文化の中に自己を位置付ける」という課題に対する一種のモデルとしての意味である。都市でも辺地でも白系ロシア人は自らの言語や文化に誇りを持っており、中国に移住しても漢民族の文化や言語には日本人のように中途半端に馴染もうとしなかった。いっぽう日本の支配下では必要に応じて積極的に日本語を習得するなど異文化と対応しながらも、自らのロシ

ア語やロシア文化をしつかりと守つて誇り高く生きていく。その姿に感動を覚えた日本人は少なくなかったのである。そのように見ていけば、『スンガリーの朝』をはじめとする石森の「満洲」作品を再評価するいとぐちが生まれるかもしれないと思われる。

付記

本稿は一九九七年度に成城大学特別研究助成費を受けた共同研究(代表・有山輝雄教授)の研究報告の一部をなすものである。

注

(1) 片岡徳雄「子ども大衆文化と学校文化」、荻須隆雄他編

『現代の子ども文化』、同文書院、一九八一年六月。

(2) 佐藤忠男・乙骨淑子「子どもの英雄像・理想像の歴史——メディアを中心として——」、現代教育学・15・子どもの生活と道徳、岩波書店、一九六一年、五六頁。

(3) 幼年倶楽部の創刊は大正十五年(昭和元年・一九二六)

の新年号である。これは、少年倶楽部の創刊からちようど十三年後であり、少女倶楽部の創刊から三年後に当たる。

(中略) 少年倶楽部は、小学校五、六年生を中心として旧

制中学校の一、二年生あたりまでを対象として発行されて

いた雑誌で、少年倶楽部を卒業した子供たちは、大正十四

年に創刊されたばかりの大衆雑誌キングへと移つてゆく傾

向が出始めていた。中学一年ぐらゐからキングを読む学生

もいたのである。ところが小学三、四年生を対象とする雑

誌が、講談社からはまだ発行されていなかった。幼年倶楽

部の登場によつて、子供たちはまず、幼年倶楽部の定期購

読者となり、それから少年倶楽部または少女倶楽部へ、さ

らにキングへ、というコースに乗ることになった。いつい

つまでも講談社の雑誌と共に——というわけである(加藤

謙一『少年倶楽部時代』、『別冊太陽・子供の昭和史 昭和十年—二十年』、平凡社、一九八六年より再引用)。

(4) 尾崎秀樹『思い出の少年倶楽部時代』、講談社、一九九

七年、三〇四—三〇五頁。なお「楠木正成」は昭和十七

(一九四二年一月号—二十一年一月号に『少年倶楽部』

(5) 日本の教科書は歴史を歪曲しているとして、一九八二年

に教科書が国際問題化するが、それ以前の例えば一九八〇

(昭和五五)年文部省検定済の中学校『新しい社会・歴史』

(東京書籍)は、「一九三一年(昭和六年)九月(横書きの

ため数字は算用数字になっている。以下同じ)、満洲にい

た日本軍は、奉天（シエンヤン＝瀋陽）の郊外で鉄道爆破事件をおこし、中国との戦いを始めた」と書いていた。爆破された鉄道が日本の権益にかかわる南満洲鉄道であったことと、それを中国側のしわざだとして開戦の口実にしたことの二つの重大な事実を省略してしまっているので、開戦のいきさつがよく理解できない。これでは相手の交通手段を奪うためか、あるいは開戦の景気付けに鉄道を爆破したととれるのである。同じ年に検定済の中学社会の歴史的分野の教科書でも、「南満洲鉄道……で爆発がおこり、鉄道がすこしいたんだ。これは満洲にいた日本軍（関東軍）がしたことであるが、関東軍はこれを中国側のしたことだとして武力攻撃を開始し、満洲全体を占領した」（日本書籍）というように、いきさつを一応理解できるように書いているものもあるが、文章がいかに無味乾燥である。こういう点では例えば『ジュニア日本歴史』の近代編（小学館、一九七八年初版）などのほうが、はるかにおもしろくてよくわかるように書かれている。

- (6) 佐々木邦『トム君・サム君』、『少年小説大系』第21巻・佐々木邦・サトウハチロー』、三一書房、一九九六年、一五五頁。

- (7) 佐藤忠男・乙骨淑子前掲論文、五〇頁。

- (8) 同前、五一―五二頁。

- (9) 田河水泡『のらくろ探険隊』、講談社、一九三九年初版、六―七頁（一九六九年の復刻版による）

- (10) 『ドキュメント・ああ清溪―ある開拓少年義勇軍の記録―』、一九六八年、私家版。

- (11) 宣伝用パンフレット『あなたも義勇軍になれます』には「内原訓練所から満洲へ行くまで」という見出しで、「何も知らずに行っても内原訓練所へ入ると満洲へ行ってもまごつかない様に教育してくれますから安心です」、「汽車も汽船も泊りも食事もすべて自分でお金を払うことはありませんから誰でも無料で満洲へ行かれます」という宣伝文句のもとに、「開拓精神」・「農民精神」・「武士道精神」の訓練に始まり、「完成」・「面会」・「渡満準備」・「壮行式」、「内原出発」・「東京行進」・「皇居遥拝」・「伊勢神宮参拝」を経て、新潟が敦賀から船で北朝鮮経由で現地訓練所に入り、二年目には「りっぱな拓士」となるいきさつを、田河水泡が二頁見開きの漫画でわかりやすく描いている箇所がある。『満蒙開拓青少年義勇軍関係資料』第4巻（復刻版・不二出版）。

- (12) 拙著『皇国の姿』を追って（皓星社・印刷中）第一部第五章参照。

(13) 槻木瑞生「解説」、『満洲国』教育史研究会監修・『満洲国』教育資料集成第Ⅱ期・『満鉄教育たより』（復刻版）、エムティ出版、一九九二年。

(14) 『満洲・満洲国』教育史研究序説・野村章遺稿集、エムティ出版、一九九五年、五七頁。

(15) この事例は野村章の教示による。

(16) 石森延男『満洲野郷土読本』を編みあげるまで、『満洲教育』昭和三（一九二八）年一月号。

(17) この点は関東局在満教務部教科書編輯部発行の、在満・関東国民学校用の補充教科「国民科大陸事情及満語」の教科書、『マンシウ 一』（第一学年用、一九四二年）には「マンシウノコドモ」という課があつてロシア人を含む「五族」の子どもの挿し絵があり、また教師用書でこれを「満洲には日本内地人・朝鮮人・満人・蒙古人・白系露人など数多の民族が住んでゐる」と解説をしていることからして、当時の公認の「民族協和」観であつたと言える。

(18) 当時満洲教育専門学校では、これと思う生徒をロシア人の家庭に下宿させて三度の食事と一緒にしながらロシア語を習得させた。しかし、中国語のばあいには同じ方法をとろうとしても「困ったことに、ロシア人のように開放的でない満人には、日本人を同居させてくれるような家庭が

見当たらない」と言っている（満洲教育専門学校同窓会・陵南会編『満洲志しがたし』、一九七二年、二〇五—二〇六頁）。

(19) 鳥居鶴美「旅に拾ふ命題」、『満鉄教育たより』第二十三号、一九三七年四月十五日、六頁（復刻版）。彼はこの中で更には次のように述べている。

彼等が土地を開き部落をつくるとき其れが如何に小さな部落であつても教会を造る事を忘れなかつた。斯くて彼等の行く処必ず信仰の鐘が鳴り渡つた。殖民に先行する教会の鐘が民衆の守り本尊の様に彼等の生活につきまとふて来た。事実遠く故国を離れた異境にあり、而も広袤只草原のみの土地に生活の根を下す人々にとつて教会は唯一最大の精神的慰安所であり、希望の対象でもあつた。（中略）折りに根ざした彼等の生活は堅実であつた。彼等の開拓と建設の営みは地味ではあつたが遠大であつた。今こそ私共は現在の自己を三省してみなければならぬ。私共には彼等の持つた敬虔な祈りの生活があるだらうか。其処に根ざした堅実さと粘り強さがあるだらうか。（六—七頁）

満鉄にゆかりの深いしかも勤勉な石森延男のことだから、この鳥居の文を多分読んでいるのではないかと思われ

る。石森の思想はこれに共感するところが多いのではなからうか。これに対する反応のようなものは管見にして知らないが、それが作品の形で現れてもよいように思われる。

(20) 前掲槻木瑞生「解説」。

(21) 南満洲鉄道株式会社調査部北満経済調査所編『北満三河露人の住宅と生活』、博文社、一九四三年。

(22) 拙論「石森国語の成立と満洲―その基盤としての『満洲補充読本』―」、『成城文芸』第一四一号、一九九二年十二月、四三―四四頁。